

—講義概要— (文学研究科 歴史学専攻)

〔博士前期課程〕

科 目 名	日本史研究(I)(文化史研究) 講義				
担当教員名	教授 松 薦 齊	単位数	4 単位	配当学期(日進)	通年
授業科目の概要	古代律令国家段階の天皇から中世天皇へ変貌を遂げ、その王権の構造と変質を具体的に論説する。				
到達目標	抽象的な理解ではなく、史料に基づいた中世天皇の実態を明らかにする。				
授業計画	1. 中世天皇の成立 2. 院政の構造 3. 保元・平治の乱 4. 平氏政権と治承・寿永の乱 5. 後鳥羽上皇と承久の乱 6. 後嵯峨院政 7. 皇統の分裂と鎌倉後期の公家政治 8. 蒙古襲来と朝廷 9. 後醍醐天皇の討幕運動 10. 建武政権 11. 南北朝の内乱 1 足利尊氏と光厳上皇 12. 南北朝の内乱 2 南朝の天皇 13. 観応の擾乱 14. 南北朝の合一と足利義満 15. 室町時代の公武関係(1) 足利義満期 16. 室町時代の公武関係(2) 足利義持期 17. 室町時代の公武関係(3) 足利義教期 18. 後南朝問題 19. 後花園天皇と伏見宮家の成立(1) 20. 後花園天皇と伏見宮家の成立(2) 21. 応仁・文明の乱 22. 戦国期の天皇と朝廷(1) 23. 戦国期の天皇と朝廷(2) 24. 戦国期の天皇と朝廷(3) 25. 戦国大名と天皇 26. 織田信長と天皇 27. 天皇と中世文化(1) 文学 28. 天皇と中世文化(2) 芸能 29. 天皇と中世文化(3) その他 30. まとめ				
準備学修 (予習・復習等に必要な時間又はそれに準じる程度の具体的な学修内容)	下記の参考書に目を通し、時代に対する理解を養うこと。				
学生に対する評価方法	レポート				
テキスト	毎回プリントを配布する。				
参考文献	久留島典子『一揆と戦国大名』(日本の歴史13、講談社) 下向井龍彦『武士の成長と院政』(日本の歴史7、講談社、2001)				

歴史学
学研究
専究
攻科

科 目 名	日本史研究(I)(文化史研究) 演習				
担当教員名	教授 松 薦 齊	単位数	4 単位	配当学期(日進)	通年
授業科目の概要	戦国公家研究の基本史料である山科言継の日記を講読する。				
到達目標	中世の古記録の読み方及び解釈の方法を身に付ける。				
授業計画	1. 『言継卿記』永禄元年正月前半 2. 『言継卿記』永禄元年正月後半 3. 『言継卿記』永禄元年2月前半 4. 『言継卿記』永禄元年2月後半 5. 『言継卿記』永禄元年3月前半 6. 『言継卿記』永禄元年3月後半 7. 『言継卿記』永禄元年4月前半 8. 『言継卿記』永禄元年4月後半 9. 『言継卿記』永禄元年5月前半 10. 『言継卿記』永禄元年5月後半 11. 『言継卿記』永禄元年6月前半 12. 『言継卿記』永禄元年6月後半 13. 『言継卿記』永禄元年7月前半 14. 『言継卿記』永禄元年7月後半 15. 『言継卿記』永禄元年8月前半 16. 『言継卿記』永禄元年8月後半 17. 『言継卿記』永禄元年9月前半 18. 『言継卿記』永禄元年9月後半 19. 『言継卿記』永禄元年10月前半 20. 『言継卿記』永禄元年10月後半 21. 『言継卿記』永禄元年11月前半 22. 『言継卿記』永禄元年11月後半 23. 『言継卿記』永禄元年12月前半 24. 『言継卿記』永禄元年12月後半 25. 『言継卿記』永禄2年正月前半 26. 『言継卿記』永禄2年正月後半 27. 『言継卿記』永禄2年2月前半 28. 『言継卿記』永禄2年2月後半 29. 『言継卿記』永禄2年3月前半 30. 『言継卿記』永禄2年3月後半				
準備学修 (予習・復習等に必要な時間又はそれに準じる程度の具体的な学修内容)	(1年)資料室などを利用して調べる (2年)各自の研究に資するように、内容を生かしてください。				
学生に対する評価方法	発表内容				
テキスト	(1年)配布プリント (2年)『言継卿記』(史料纂集)				
参考文献	(1年)奥野高広『言継卿記—転換期の貴族生活—』(高桐書院、1947) 今谷 明『言継卿記—公家社会と町衆文化の接点—』(そしえて社、1980) 清水克行『『言継卿記』—庶民派貴族の視点』(元木泰雄・松薦齊編『日記で読む中世史』ミネルヴァ書房、2011)				

科 目 名	日本史研究(Ⅱ)(社会経済史研究) 講義				
担当教員名	教授 福島金治	単位数	4単位	配当学期(日進)	通年
授業科目の概要	<p>日本列島は海に囲まれ、近隣の地域の国家や人々と交流し、技術や産物が行き來した。この分野の最近の研究は、従来の国を基本におくスタンスから、幅のある境界に生きる人々の相互交流をベースに考える方向にすすんでいる。このような視覚から、多くの新たな研究成果が生まれている。また、考古学や美術史・自然科学などとコラボして学際的に研究されるようになったことも特色の一つである。</p> <p>キリスト教史料や『朝鮮日々記』などを通して、16世紀末の東アジアと日本の様子を具体的にみていきたい。</p>				
到達目標	<p>中世の政治権力や社会・文化の状態を人々の交流から考え、時には非条理な暴力におよぶありさまも含めて考えてみたい。本年は16世紀末のキリスト教と織豊政権、文禄・慶長の役について講義し、当時の社会を史料を通して具体的に考えてみることができるようになる。</p>				
授業計画	<p>[春学期] 1 ヨーロッパ人の来日と国内勢力 2~6 ルイス・フロイス『日本史』よりみた日本 -キリスト教と日本国内の統一戦争まで- 7~14 織豊政権の対外政策 15 まとめ</p> <p>[秋学期] 1 文禄・慶長の役 2~14 文禄・慶長の役の具体的内容 -名護屋城、合戦の内容、軍勢動員、陶工など- 15 まとめ</p>				
準備学修 (予習・復習等に必要な時間又はそれに準じる程度の具体的な学修内容)	関連する図書をできるだけ読むこと。				
学生に対する評価方法	出席を確認する。春・秋学期ともにレポートを提出する。				
テキスト	資料プリントを配布する。				
参考文献					

科 目 名	日本史研究(Ⅱ)(社会経済史研究) 演習				
担当教員名	教授 福島金治	単位数	4単位	配当学期(日進)	通年
授業科目の概要	<p>(1年)中世の権力形態や社会の様相を理解し、修士論文作成の基礎的な力をつける。具体的には、院生それぞれの自身の関心ある「テーマに必要な史料・論文等を蒐集・選択して読解し、内容を検討して研究史に位置づける。</p> <p>(2年)修士論文を完成させるため、先行研究の内容を学んで検討し、関連する史料を解釈し自身の主張を引き出す力をつける。</p>				
到達目標	<p>演習の形態は、以下の通りである。</p> <ol style="list-style-type: none"> 史料を輪読して内容を解釈する。 院生が自身の研究テーマにもとづいて行う個別発表の2つを組み合わせて行っていく。 <p>要点は以下の通りである。</p> <ol style="list-style-type: none"> 輪読する史料は院生の関心のある素材を選定し、修論作成に役立つようとする。 研究史の整理と問題発見のために、論文を熟読し、討論する。 ゼミでは、毎回、レジュメを作成する。 				
授業計画	<p>[春学期] 1 ガイダンス 2~3 院生の発表 4~10 中世の文献史料を読む。 11~14 研究発表と質疑 15 まとめ</p> <p>[秋学期] 1 ガイダンス 2~5 院生の発表・質疑 6~10 中世の文献史料を読む。 11~14 研究発表と質疑 15 まとめ</p>				
準備学修 (予習・復習等に必要な時間又はそれに準じる程度の具体的な学修内容)	<p>(1)学内・学外の研究会・学会に「積極的に参加し、知見を広げる。</p> <p>(2)他の大学の大学院生と交流をもち、研究内容のはばをひろげる。</p> <p>(3)自身の研究に関する研究史を知るために、研究論文目録を作成する。</p>				
学生に対する評価方法	春・秋学期ともにレポートを課す。ゼミの発表と加味して評価する。				
テキスト	資料は、適宜、配布する。				
参考文献					

科 目 名	日本史研究(Ⅲ)－1(政治史研究) 講義				
担当教員名	教授 中 川 すがね	単位数	4 単位	配当学期(日進)	通年
授業科目の概要	昨年に引き続き、日本近世の経世論について実際にテキストを輪読しながら、その内容と時代背景を考える。				
到達目標	1 経世論のテキストを読んで理解する。 2 経世論の内容とその背景について理解する。				
授業計画	<p>1 ガイダンス 授業の進め方 2 昨年度のまとめ 3 以降、1人概説1回・テキスト読解2回・経世思想の特質2回で、5人の経世家を取り上げる。 経世家については、太宰春台(3-7回)、安藤昌益(8-12回)、工藤兵助(13-17回)、佐藤信淵(18-22回)、渡辺翠山(23-27回)を予定している。 28-30回 まとめ</p>				
準備学修 (予習・復習等に必要な時間又はそれに準じる程度の具体的な学修内容)	経世家のテキストを前もって配るので、予習して、輪読に備えること。				
学生に対する評価方法	授業での輪読の状況により評価する				
テキスト	プリントを配布する。				
参考文献	授業内で紹介する。				

科 目 名	日本史研究(Ⅲ)－1(政治史研究) 演習				
担当教員名	教授 中 川 すがね	単位数	4 単位	配当学期(日進)	通年
授業科目の概要	院生各自の研究を深めるため、研究発表・論文講読・古文書輪読を行う。				
到達目標	1 卒業論文の反省を行う 2 近世古文書読解のスキルを高める 3 論文読解のスキルを高める				
授業計画	<p>(1年)</p> <p>1 打ち合わせ・研究の目的とスケジュールの確認 2 卒論等の発表 3 卒論等の発表 4 論文リストの提出と研究 5 論文リストの提出と研究 6 史料リストの提出 7 史料リストの提出 8 論文を読む 9 論文を読む 10 古文書を読む 11 古文書を読む 12 論文を読む 13 論文を読む 14 古文書を読む 15 古文書を読む</p> <p>(2年)</p> <p>1 打ち合わせ・研究の目的とスケジュールの確認 2 ミニ論文の計画発表 3 古文書を読む 4 古文書を読む 5 古文書を読む 6 史料リストの提出 7 史料リストの提出 8 古文書を読む 9 古文書を読む 10 古文書を読む 11 古文書を読む 12 古文書を読む 13 古文書を読む 14 古文書を読む 15 古文書を読む</p> <p>上記スケジュールは適宜変更する。</p> <p>上記スケジュールは適宜変更する。</p>				
準備学修 (予習・復習等に必要な時間又はそれに準じる程度の具体的な学修内容)	授業で出す課題の予習と確認、および大学院生として自分の研究を計画的に進めることが必要である。				
学生に対する評価方法	研究報告・講読・輪読の内容により評価する。				
テキスト					
参考文献	授業中に適宜紹介する。				

科 目 名	日本史研究(Ⅲ)－2(政治史研究) 講義				
担当教員名	教授 後藤致人	単位数	4単位	配当学期(日進)	通年
授業科目の概要	日本近世後期から近現代について、政治史を中心に講義する。ただ、思想史や文化史なども織り交ぜながら進め、受講者一人ひとりの日本近現代史のイメージをより豊かにしていくように努力していきたい。また、日本近現代史の研究史を意識し、現在何が課題であるのか、理解できるようにしたい。春学期では、幕末維新期から日露戦争・大正デモクラシーを経て、昭和初期までを範囲にして議論を展開していきたい。秋学期では、昭和戦前期の政治構造、そして戦後の政治構造を中心に論じる。				
到達目標	この授業によって、近現代政治史の多面的な姿が把握できるようになる。また、日本近現代史の現在の研究状況を理解できる。				
授業計画	<p>(春学期)</p> <p>1、ガイダンス 2、日本近現代史の研究状況① 3、日本近現代史の研究状況② 4、幕末維新政治史研究① 5、幕末維新政治史研究② 6、幕末維新政治史研究③ 7、明治天皇と宮中 8、日清・日露戦争と国民国家の形成 9、明治憲法体制の成立と上奏・内奏① 10、明治憲法体制の成立と上奏・内奏② 11、天皇制の研究史 12、大正デモクラシー論① 13、大正デモクラシー論② 14、愛知県の近代史上の位置づけ 15、まとめ</p> <p>(秋学期)</p> <p>1、ガイダンス 2、ファシズム論の研究史 3、昭和戦前期の政治構造における宮中の位置 4、昭和戦前期の政治構造における陸軍の位置 5、昭和戦前期の政治構造における海軍の位置 6、昭和戦前期の政治構造における政党勢力の位置 7、近衛文麿と木戸幸一 8、『昭和天皇実録』を読む① 9、『昭和天皇実録』を読む② 10、昭和天皇と上奏・内奏 11、戦前・戦後の画期と連続 12、象徴天皇制と戦後政治 13、戦後政治における岸信介内閣の位置づけ 14、天皇の代替わりと冷戦構造の終焉 15、日本近現代史研究の課題</p>				
準備学修 (予習・復習等に必要な時間又はそれに準じる程度の具体的な学修内容)	日本近現代史の通史を予習しておくと、講義がより理解できる。ただ、この講義では復習に重点を置いてもらいたい。1回ごとの講義の内容を理解できるように復習し、次の講義への準備としたい。				
学生に対する評価方法	授業による出席を前提に、学期末試験で評価する。				
テキスト	適宜プリントを配布する。				
参考文献	購入する必要はないが、拙著『内奏』(中公新書 2010)を参照されたい。				

科 目 名	日本史研究(Ⅲ)－2(政治史研究) 演習				
担当教員名	教授 後藤致人	単位数	4単位	配当学期(日進)	通年
授業科目の概要	日本近現代史のうち特に政治史を中心に史料読解を行う。近現代史の史料は多岐にわたっているが、現在公文書と私文書をバランスよく活用することが求められている。ただ、公文書の史料活用方法と私文書のそれとは、大きく異なっている。このことを意識しながら、史料の読み方・調べ方を教えていきたい。				
到達目標	日本近現代史の一次史料の読解の仕方、利用の仕方がわかる。				
授業計画	<p>(春学期)</p> <p>1、ガイダンス 2、公文書の調べ方 3、私文書の調べ方 4、昭和戦前期海軍の私文書読解① 5、昭和戦前期海軍の私文書読解② 6、昭和戦前期海軍の私文書読解③ 7、昭和戦前期海軍の私文書読解④ 8、昭和戦前期海軍の私文書読解⑤ 9、昭和戦前期海軍の私文書読解⑥ 10、昭和戦前期海軍の公文書読解① 11、昭和戦前期海軍の公文書読解② 12、昭和戦前期海軍の公文書読解③ 13、昭和戦前期海軍の公文書読解④ 14、昭和戦前期海軍の公文書読解⑤ 15、まとめ</p> <p>(秋学期)</p> <p>1、ガイダンス 2、『昭和天皇実録』読解① 3、『昭和天皇実録』読解② 4、『昭和天皇実録』読解③ 5、『昭和天皇実録』読解④ 6、『昭和天皇実録』読解⑤ 7、宮中関係史料の再検討① 8、宮中関係史料の再検討② 9、宮中関係史料の再検討③ 10、宮中関係史料の再検討④ 11、宮中関係史料の再検討⑤ 12、公文書と私文書のバランスとは何か① 13、公文書と私文書のバランスとは何か② 14、公文書と私文書のバランスとは何か③ 15、まとめ</p>				
準備学修 (予習・復習等に必要な時間又はそれに準じる程度の具体的な学修内容)	与えられた課題の予習をしっかりと進めること。この演習は予習が中心であるが、誤った点について、しっかりと復習すること。				
学生に対する評価方法	授業での出席を前提に、演習での発表(80%)、学期末でのレポート(20%)で評価を決める。				
テキスト	演習中に適宜プリントを配布する。				
参考文献					

科 目 名	東洋史研究(Ⅱ)(社会経済史研究) 講義				
担当教員名	教授 菊 池 一 隆	単位数	4 単位	配当学期(日進)	通年
授業科目の概要	第2次世界大戦の諸相にアプローチするために、今回は世界華僑を素材としてとりあげる。どのように史料を調査収集し、構成、分析し、結論を導き出すかを教えることで、歴史実態のみならず、院生各位がそれぞれ修士論文、博士論文を作成する際の方法論を学ばせる。				
到達目標	本講義は、①グローバルな視点から重要問題として浮上している華僑を焦点を当てる。②時期的には第2次世界大戦、すなわち日中戦争、太平洋戦争に連動する激動の時期であり、華僑の世界的動態に着目する。これらを歴史的背景も踏まえながら明らかにしたい。当然のことながら、本講義を通じて院生たちはテーマの決め方、アプローチの仕方、分析法、結論の導き方を学ぶ。				
授業計画	1、導入—第2次世界大戦期を中心に— 2、華僑研究の現状と課題、展望(1) 3、同上(2) 4、中国国民政府の華僑政策と機構(1) 5、同上(2) 6、南京汪精衛政権の華僑政策と機構(1) 7、タイ華僑(1) 8、同上(2) 9、アメリカ華僑(1) 10、同上(2) 11、同上(3) 12、関連本に関する個別発表と討論(1) 13、関連本に関する個別発表と討論(2) 14、関連本に関する個別発表と討論(3) 15、総括と討論・疑問	16、導入—抗日と親日— 17、カナダ華僑(1) 18、同上(2) 19、同上(3) 20、万宝山事件における朝鮮華僑弾圧問題 21、日本外務省の動き 22、中国外交部の動き 23、日本のマスコミによる報道 24、中国マスコミによる報道 25、関連本に関する個別発表と討論(1) 26、関連本に関する個別発表と討論(2) 27、関連本に関する個別発表と討論(3) 28、関連本に関する個別発表と討論(4) 29、討論・疑問 30、総括			
準備学修 (予習・復習等に必要な時間又はそれに準じる程度の具体的な学修内容)	歴史学科の共同研究室(3号館4F)などをを利用して、関連事項、文献の予習・復習の習慣を身につけてもらいたい。				
学生に対する評価方法	各自の報告、努力、質疑応答の内容、熱意、参加状況などを総合的に判断して評価する。				
テキスト	関連文献・資料などを適時紹介、もしくは適時配布する。				
参考文献					

科 目 名	東洋史研究(Ⅱ)(社会経済史研究) 演習				
担当教員名	教授 菊 池 一 隆	単位数	4 単位	配当学期(日進)	通年
配当学期(栄)					
授業科目の概要	(1年)将来、修士論文を書くために論述の仕方、論理的展開をするための基礎を築く。特に日本各地の図書館、および海外での史料調査、収集能力を高める。 (2年)論述の仕方、論理的展開をするための能力を強化し、修士論文完成を目指す。				
到達目標	(1年)目標は当然、院生が主体的に関心のもつテーマを探究し、修士論文、博士論文、投稿論文の作成にあるが、その過程で、実証力、分析力、まとめあげる力、探究する力、歴史の本質を考える力を養っていく。また、中国や台湾の研究者の関係学術論文(いずれも中国語)を輪読する。他人の発表にも疑問や質問を出し、討論に積極的に参加することが望ましい。時代・テーマ的には宋代以降、アヘン戦争(1839~1842年)を経て現代中国に至るまでの社会経済、政治・外交・軍事・思想・文化・教育各史である。地域的には、中国、台湾、朝鮮、東南アジア、インドなどを包括する。 (2年)目標は当然、院生が主体的に関心のもつテーマを探究し、修士論文、投稿論文の作成にあるが、その過程で、実証力、分析力、まとめあげる力、探究する力、歴史の本質を考える力を養っていく。また、中国や台湾の研究者の関係学術論文(いずれも中国語)にも目を配る。他人の発表にも疑問や質問を出し、討論に積極的に参加することが望ましい。時代・テーマ的には宋代以降、アヘン戦争(1839~1842年)を経て現代中国に至るまでの社会経済、政治・外交・軍事・思想・文化・教育各史である。地域的には、中国、台湾、朝鮮、東南アジア、インドなどを包括する。				
授業計画	1、導入 2、論文作成のための指導(1) 3、論文作成のための指導(2) 4、論文作成のための指導(3) 5、個別発表と討論(論文構想、及び関連本、論文、史料)(1) 6、個別発表と討論(論文構想、及び関連本、論文、史料)(2) 7、個別発表と討論(論文構想、及び関連本、論文、史料)(3) 8、個別発表と討論(論文構想、及び関連本、論文、史料)(4) 9、中間報告と討論(内容の部分発表)(1) 10、中間報告と討論(内容の部分発表)(2) 11、中間報告と討論(内容の部分発表)(3) 12、中間報告と討論(内容の部分発表)(4) 13、個別発表と討論(各自の構想に基づき研究を進展)(1) 14、個別発表と討論(各自の構想に基づき研究を進展)(2) 15、個別発表と討論(各自の構想に基づき研究を進展)(3)	16、個別発表と討論(各自の構想に基づき研究を進展)(4) 17、個別発表と討論(各自の構想に基づき研究を進展)(5) 18、個別発表と討論(各自の構想に基づき研究を進展)(6) 19、個別発表と討論(各自の構想に基づき研究を進展)(7) 20、個別発表と討論(各自の構想に基づき研究を進展)(8) 21、個別発表と討論(各自の構想に基づき研究を進展)(9) 22、これまでの個別発表をまとめ、報告(1) 23、これまでの個別発表をまとめ、報告(2) 24、これまでの個別発表をまとめ、報告(3) 25、これまでの個別発表をまとめ、報告(4) 26、未完成部分、不十分な部分の補強(1) 27、未完成部分、不十分な部分の補強(2) 28、未完成部分、不十分な部分の補強(3) 29、最終報告 30、総括			
準備学修 (予習・復習等に必要な時間又はそれに準じる程度の具体的な学修内容)	(1年)報告の予習、復習は不可欠である。実力アップのためには他の院生が指名された箇所の予習、復習をするよう指導している。 (2年)予習、復習は不可欠である。実力アップのためには他の院生の報告に対しても予習、復習をするよう指導している。				
学生に対する評価方法	各自の研究報告の内容、構想力、史料の使い方、探究度、分析力、及び努力、論文の質量、質疑応答の内容などを総合的に判断して評価する。				
テキスト	各自の研究、報告に対して適時指導する。				
参考文献					

科 目 名	西洋史研究(Ⅱ)(政治経済史研究) 講義				
担当教員名	教授 小林 隆夫	単位数	4 単位	配当学期(日進)	通年
授業科目の概要	英露のユーラシア全域をめぐる抗争、いわゆるグレートゲームの展開を背景としながら、イギリスの日本、中国、および東南アジアにおける政策を論じ、西洋と東アジアの国際秩序の相違や、イギリスの東アジア政策におけるインドの役割などを考察していく。イギリス外交文書の読解と分析を中心に講義を進めていく。				
到達目標	英露のユーラシア全域をめぐる抗争を軸として、19世紀の歴史を全世界史的視野からとらえる力を身につける。				
授業計画	<p>(春学期)</p> <p>I グレートゲームの展開</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 英露のグレートゲームの始まり 2. ユーラシアにおける英露両国の台頭 3. 1820年代から30年代のイギリスのユーラシア政策(1) 4. 同上(2) 5. 1840年代から60年代のイギリスのユーラシア政策 6. 1870年代における英露抗争 <p>II 東アジアにおけるイギリス</p> <ol style="list-style-type: none"> 7. 2度の英中戦争 8. 協力政策の形成 9. イギリスと日本 10. 琉球をめぐる日中対立とイギリス 11. 朝鮮開国をめぐる英米の外交 12. 壬午・甲申事変(1) 13. 同上(2) 14. 東南アジアにおけるイギリスの前進 15. ベトナムをめぐる清仏対立とイギリス <p>(秋学期)</p> <p>1 フランス・ロシアとの緊張</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. アフガニスタンにおける英露抗争の激化 2. フランスの東南アジアへの勢力拡張とイギリスの上ビルマ併合 3. アフガニスタンにおける英露抗争とイギリス海軍の巨文島占領事件 4. 巨文島撤退と宗主権認知問題 5. ロシアの極東政策とイギリスの朝鮮政策(1) 6. 同上(2) 7. 同上(3) <p>II 日清戦争から日露戦争へ</p> <ol style="list-style-type: none"> 8. 1890年代の朝鮮とイギリス 9. 日清戦争とイギリス 10. 日清戦争後のイギリス東アジア政策 11. イギリスと日露戦争 <p>III チベットをめぐる英露の駆け引き</p> <ol style="list-style-type: none"> 12. チベット政策の起源 13. ロシアのチベット接近とイギリスのチベット政策の変化 14. ヤングハズバンド軍事使節団の派遣と英中関係の混亂 15. グレートゲームの終わり～1907年の英露協定 				
準備学修 (予習・復習等に必要な時間又はそれに準じる程度の具体的な学修内容)	予習：教科書および配布資料(英文の場合もあり)の次回講義分に読み、疑問点などを整理しておく。 復習：講義内容を確認し、各学期に提出するレポートの下準備をしておく。				
学生に対する評価方法	平常点(授業に対する熱意、参加度の30点)および春秋学期2度のレポート試験(70点)にて評価する。				
テキスト	レジュメを配布する				
参考文献	小林隆夫『19世紀イギリス外交と東アジア』彩流社、2012年刊、3600円+税				

科 目 名	西洋史研究(Ⅱ)(政治経済史研究) 演習				
担当教員名	教授 小林 隆夫	単位数	4 単位	配当学期(日進)	通年
授業科目の概要	1. 院生の研究領域に近いヨーロッパ近現代史に関する専門資料や論文を読み進め、解説を加えながら、院生の研究に対する関心を深めていく。 (1年) 2. 院生は研究史の整理を中心として、研究報告を年4回ほど行う。 (2年) 2. 修士論文作成指導を行う。				
到達目標	(1年) 先行研究を収集して読解作業を進めることで、修士論文作成に要求される基礎的理解力と技術力を高める。 (2年) 修士論文を完成させるとともに、将来の更なる研究発展のための能力を高める。				
授業計画	<p>(1年)</p> <p>(春学期) (秋学期)</p> <p>①オリエンテーション ①資料講読と解説</p> <p>②学部における研究状況の整理と報告・講読用資料(史料)の選定 ②資料講読と解説</p> <p>③資料講読と解説 ③資料講読と解説</p> <p>④資料講読と解説 ④資料講読と解説</p> <p>⑤資料講読と解説 ⑤資料講読と解説</p> <p>⑥資料講読と解説 ⑥資料講読と解説</p> <p>⑦資料講読と解説 ⑦資料講読と解説</p> <p>⑧資料講読と解説 ⑧研究進捗状況報告</p> <p>⑨資料講読と解説 ⑨資料講読と解説</p> <p>⑩資料講読と解説 ⑩資料講読と解説</p> <p>⑪資料講読と解説 ⑪資料講読と解説</p> <p>⑫資料講読と解説 ⑫資料講読と解説</p> <p>⑬資料講読と解説 ⑬資料講読と解説</p> <p>⑭資料講読と解説 ⑭資料講読と解説</p> <p>⑮研究進捗状況報告</p> <p>(2年)</p> <p>(春学期) (秋学期)</p> <p>①研究状況報告と修論テーマの検討 ①修論進捗状況報告</p> <p>②資料講読と解説 ②資料講読と解説</p> <p>③資料講読と解説 ③資料講読と解説</p> <p>④資料講読と解説 ④資料講読と解説</p> <p>⑤資料講読と解説 ⑤資料講読と解説</p> <p>⑥資料講読と解説 ⑥資料講読と解説</p> <p>⑦資料講読と解説 ⑦資料講読と解説</p> <p>⑧資料講読と解説 ⑧研究進捗状況報告</p> <p>⑨研究進捗状況報告 ⑨資料講読と解説</p> <p>⑩資料講読と解説 ⑩資料講読と解説</p> <p>⑪資料講読と解説 ⑪資料講読と解説</p> <p>⑫資料講読と解説 ⑫資料講読と解説</p> <p>⑬資料講読と解説 ⑬資料講読と解説</p> <p>⑭資料講読と解説 ⑭資料講読と解説</p> <p>⑮研究進捗状況報告</p>				
準備学修 (予習・復習等に必要な時間又はそれに準じる程度の具体的な学修内容)	(1年) 予習：毎回行う資料(英文中心)を翻訳し、専門用語などを調べて演習に臨むこと。 演習で取り上げる以外の和文等の研究文献を収集して、先行研究のノートを作っていく。 復習：演習内容を確認して自己の研究整理ノートを作っておく。 (2年) 予習：毎回行う資料(英文中心)を翻訳し、専門用語などを調べて演習に臨むこと。 先行研究史の概要を漸次整理しておく。 復習：春学期中に修士論文構想を練り、秋学期に整理できた章から草稿を作成しておく。				
学生に対する評価方法	予習・研究報告内容(50点)・レポート(50点)の100点満点で評価				
テキスト	院生の問題意識に見合う専門論文・文献を使用していく。				
参考文献	院生各自に見合った文献を紹介する。				

科 目 名	考古学研究(I)(先史考古学研究) 講義				
担当教員名	教授 白 石 浩 之	単位数	4 単位	配当学期(日進)	通年
授業科目の概要	先史時代が狩猟採集の時代ということである。狩猟は人類が生存していくためになくてはならない活動である。それ故狩猟具は技術を発展させることができが宿命とも言える。旧石器時代から縄文時代初頭期の概要を紹介しながら狩猟活動を分析しよう。				
到達目標	先史時代は狩猟採集の時代である。狩猟は人類が生存していくためになくてはならない活動である。そのために旧石器時代から縄文時代の狩猟具の中心的な道具であった石槍を中心としてそれがどのような形態を有し、どのように変化してきたのか分析しようと思う。そして石槍文化の社会や文化について考えてみようと思う。到達目標としては狩猟具の変化が何を意味するのか。その意義づけがわかるようにする。				
授業計画	1. はじめに 2. 人類と旧石器時代 3. ヨーロッパの旧石器時代研究 4. 世界の前期旧石器時代から中期旧石器時代文化 5. 世界の後期旧石器時代から中石器時代文化 6. 埋葬と洞窟祭祀 7. 群馬県岩宿遺跡の成果 8. 日本旧石器時代文化の編年 9. 尖頭器・槍先形尖頭器・木葉形尖頭器・石槍・剥片尖頭器・有舌尖頭器 10. 槍先形狩猟具とは 11. 台形様石器 12. ナイフ形石器 13. 細石器 14. 旧石器時代の環境 15. 石槍に使う石材 16. 石槍の起源 17. 石槍の製作 18. 石槍の種類 19. 石槍の編年(1) 20. 石槍の編年(2) 21. 石槍と石器組成 22. 神奈川県高座渋谷団地内遺跡 23. 神奈川県中村遺跡 24. 千葉県東内野遺跡 25. 長野県神子柴遺跡 26. 新潟県本ノ木遺跡 27~30. まとめ				
準備学修 (予習・復習等に必要な時間又はそれに準じる程度の具体的な学修内容)	毎週土曜に考古学整理室にて1限から出土品整理を実施しています。遺物に接する中で旧石器時代から縄文時代の流れを体得しませんか。				
学生に対する評価方法	研究意欲・独創性など総合的に評価する。				
テキスト					
参考文献	白石浩之1989『旧石器時代の石槍』UP考古学選書7 東京大学出版会 同2010『尖頭器石器群』「2 旧石器時代」講座日本の考古学 青木書店				

科 目 名	考古学研究(I)(先史考古学研究) 演習				
担当教員名	教授 白 石 浩 之	単位数	4 単位	配当学期(日進)	通年
授業科目の概要	2年間の中で、研究分野の水準が得られるような修士論文の執筆を目指して、問題点、課題を解析させ、研究の視点を注視させる。 分析力を高め、興味が高じるように指導する。				
到達目標	先史考古学を研究するにあたって、(1)総合研究法、(2)集落研究法、(3)遺物研究法について、秀逸な論文を用いてその問題点や課題について研究発表を行う。同時に修論の進捗状況について、予備発表、経過発表をし、その方向性について検討する。				
授業計画	1. はじめに 2. 旧石器時代研究 3. 論文解析(1) 4. 論文解析(2) 5. 論文解析(3) 6. 旧石器時代集落研究 7. 論文解析(4) 8. 論文解析(5) 9. 旧石器時代遺物研究 10. 論文解析(6) 11. 論文解析(7) 12. 修論予備発表(I) 13. 論文解析(8) 14. 論文解析(9) 15. まとめ 16. 縄文時代遺物研究 17. 論文解析(9) 18. 論文解析(10) 19. 修論予備発表(II) 20. 論文解析(11) 21. 論文解析(12) 22. 論文解析(13) 23. 縄文時代集落研究(1) 24. 縄文時代集落研究(2) 25. 縄文時代遺物研究(1) 26. 縄文時代遺物研究(2) 27. 論文解析(14) 28. 論文解析(15) 29. 修論予備発表(III) 30. まとめ				
準備学修 (予習・復習等に必要な時間又はそれに準じる程度の具体的な学修内容)	毎週土曜日または金曜日1限から1日出土品整理に伴う報告書作成作業を行っている。このプログラムに自主的に参加すれば先史考古学のより専門的な研究が体得できる。				
学生に対する評価方法	研究意欲、独創性、発表要旨作成、発掘調査マネジメントの参画など総合的に評価する。				
テキスト	その都度プリントを印刷してテキストとする。				
参考文献	白石浩之2008『旧石器時代の社会と文化』日本史リブレット1 山川出版社、今村啓爾2008『縄文の豊かさと限界』日本史リブレット2 山川出版				

科 目 名	考古学研究(Ⅱ)(歴史考古学研究) 講義				
担当教員名	教授 藤澤 良祐	単位数	4 単位	配当学期(日進)	通年
授業科目の概要	5世紀初頭における須恵器の出現以降、日本列島ではさまざまな種類の陶磁器が生産されている。特に、その中心地である東海地方で生産された陶磁器は、列島各地の遺跡から出土し、遺跡の年代や性格を考える上で重要な役割を果たしている。本講義では、窯業遺跡の発掘調査の成果を基に、①出土遺物の型式学的研究、②検出遺構の機能論、③窯跡の分布論といった考古学的な研究方法を通して、古代から中世における当地方の窯業生産の実態を解明しつつ、生産・流通システムの復原を試みる。				
到達目標	日本における土器・陶磁器の生産の歴史と、東海地方における古代から中世の窯業生産について理解を深めることを目標とする。				
授業計画	春学期 1. 考古学における陶磁器研究の意義 2. 窯業史概説—土器・陶磁器の分類— 3. 窯業史概説—土器・陶磁器の変遷— 4. 土器の焼成 5. 陶器の焼成 6. 古代猿投窯の展開(1) 7. 古代猿投窯の展開(2) 8. 東濃窯の灰釉陶器生産 9. 中世窯の分類 10. 東海地方の中世窯 11. 山茶碗窯の経営形態(1) 12. 山茶碗窯の経営形態(2) 13. 山茶碗の生産体制 14. 山茶碗の出土分布 15. レポート作成				
秋学期	1. 古瀬戸とは何か 2. 古瀬戸の変遷 3. 古瀬戸と輸入陶磁 4. 古瀬戸成立の背景 5. 古瀬戸と輸入陶磁 6. 古瀬戸焼成窯の生産構造(1) 7. 古瀬戸焼成窯の生産構造(2) 8. 中世瀬戸窯の形成過程(1) 9. 中世瀬戸窯の形成過程(2) 10. 「古瀬戸系施釉陶器窯」の成立過程(1) 11. 「古瀬戸系施釉陶器窯」の成立過程(2) 12. 古瀬戸製品の出土分布 13. 埋納された古瀬戸製品(1) 14. 埋納された古瀬戸製品(2) 15. 総括				
準備学修 (予習・復習等に必要な時間又はそれに準じる程度の具体的な学修内容)	事前にプリントを配布するので、専門用語については下記の参考書により予習をしておくこと。				
学生に対する評価方法	毎回の授業の出席状況だけではなく、授業態度も考慮し、授業時の応答やレポート等を加味して評価する。授業態度20%、授業への貢献度20%、レポート60%。				
テキスト	教材として事前にプリントを配布する。				
参考文献	藤澤良祐2005『瀬戸窯跡群』同成社、矢部良明ほか編2002『日本陶磁大辞典』角川書店				

科 目 名	考古学研究(Ⅱ)(歴史考古学研究) 演習				
担当教員名	教授 藤澤 良祐	単位数	4 単位	配当学期(日進)	通年
授業科目の概要	陶磁器の編年研究は、歴史考古学における研究の基礎である。古代以降の窯業生産の中心地である東海地方には、数十カ所で窯業地の存在が確認されており、各窯業地では編年研究が盛んに進められているが、その内容・精度は必ずしも充分なものとはいえない。本演習では、発掘調査報告書の作成を通して各窯業地の研究史を整理し問題点を抽出するとともに、各陶磁器の分類や実測を通して型式学的研究方法を実践する。また、各窯業地の窯跡の分布状況、窯跡の構成要素、製品の出土分布を明らかにすることにより、各窯業地の生産構造の解明をめざす。				
到達目標	(1年)窯業遺跡の発掘調査報告書の作成を通して、歴史考古学の専門技術を習得するとともに、修士論文作成に向けて、各自の研究テーマを明確にすることを目標とする。 (2年)発掘調査報告書の作成を通して歴史考古学の専門技術を習得することによって、修士論文の作成に結実するを目標とする。				
授業計画	(1年) 1. 東海地方の窯業生産 2. 窯業遺跡の編年方法 3. 各窯業地の研究史の整理(1) 4. 各窯業地の研究史の整理(2) 5. 各窯業地の研究史の整理(3) 6. 各窯業地の研究史の整理(4) 7. 研究史上の問題点の抽出 8. 陶磁器の製作技法 9. 各窯跡の器種構成の確認(1) 10. 各窯跡の器種構成の確認(2) 11. 各器種の変遷過程の検証(1) 12. 各器種の変遷過程の検証(2) 13. 各器種の変遷過程の検証(3) 14. 型式の設定(1) 15. 型式の設定(2)				
	(2年) 16. 型式の組合せと様式の設定(1) 17. 型式の組合せと様式の設定(2) 18. 編年基準資料と絶対年代(1) 19. 編年基準資料と絶対年代(2) 20. 各窯跡の分布状況の確認(1) 21. 各窯跡の分布状況の確認(2) 22. 各窯跡の分布状況の確認(3) 23. 各窯業地の群構成の解釈(1) 24. 各窯業地の群構成の解釈(2) 25. 各器種の変遷過程の検証(1) 26. 各器種の変遷過程の検証(2) 27. 各器種の変遷過程の検証(3) 28. 修士論文の作成方法(1) 29. 修士論文の作成方法(2) 30. 修士論文の作成方法(3)				
準備学修 (予習・復習等に必要な時間又はそれに準じる程度の具体的な学修内容)	各自の研究内容や研究の進捗に応じて適宜指示する。				
学生に対する評価方法	毎回の授業の出席状況だけではなく、授業態度や発表内容も考慮し、授業時の応答やレポート等を加味して評価する。授業への参加度(貢献度) 50%、レポート50%。				
テキスト	教材は適宜指示する(各窯跡の発掘調査報告書等)。				
参考文献	藤澤良祐2008『中世瀬戸窯の研究』高志書院				

科 目 名	東洋史特殊研究 講義																																		
担当教員名	非常勤講師 竹 内 弘 行	単位数	4 単位	配当学期(日進)	通年																														
授業科目の概要	むかし中国では、王の左右に「左史」「右史」という歴史記録官がひかえていて、王が「動けば則ち左史がこれを書し、言えば則ち右史がこれを書した」と伝えられている。これが『春秋』という歴史書となり、歴史の国といわれる中国史の原点になる。本講のねらいは、この歴史書に手を加えた孔子の意図とその影響を、原文の理解、その翻訳、関係資料の紹介など高度な歴史理解に必要な諸事項の説明をとおして身につけることにある。																																		
到達目標	中国史学の原点は、孔子が筆削したという『春秋(経)』である。その書は、「春秋の筆法」をもって書かれ、孔子の理想が托されていた。本講では、春秋経文の筆削を手がかりに、孔子の理想を解明しようとした康有為著『春秋筆削大義微言考』の解説をとおして、その内実に迫る。																																		
授業計画	<table border="0"> <tr><td>1.春秋学概説</td><td>16.文公・宣公解説(一)</td></tr> <tr><td>2.題辞の説明</td><td>17. " (二)</td></tr> <tr><td>3.隱公解説(一)</td><td>18. " (三)</td></tr> <tr><td>4. " (二)</td><td>19. " (四)</td></tr> <tr><td>5. " (三)</td><td>20. " (五)</td></tr> <tr><td>6. " (四)</td><td>21.成公・襄公解説(一)</td></tr> <tr><td>7.桓公・莊公・僖公解説(一)</td><td>22. " (二)</td></tr> <tr><td>8. " (二)</td><td>23. " (三)</td></tr> <tr><td>9. " (三)</td><td>24. " (四)</td></tr> <tr><td>10. " (四)</td><td>25. " (五)</td></tr> <tr><td>11. " (五)</td><td>26.昭公解説(一)</td></tr> <tr><td>12. " (六)</td><td>27. " (二)</td></tr> <tr><td>13. " (七)</td><td>28. " (三)</td></tr> <tr><td>14. " (八)</td><td>29. " (四)</td></tr> <tr><td>15. " (九)</td><td>30. " (五)</td></tr> </table>					1.春秋学概説	16.文公・宣公解説(一)	2.題辞の説明	17. " (二)	3.隱公解説(一)	18. " (三)	4. " (二)	19. " (四)	5. " (三)	20. " (五)	6. " (四)	21.成公・襄公解説(一)	7.桓公・莊公・僖公解説(一)	22. " (二)	8. " (二)	23. " (三)	9. " (三)	24. " (四)	10. " (四)	25. " (五)	11. " (五)	26.昭公解説(一)	12. " (六)	27. " (二)	13. " (七)	28. " (三)	14. " (八)	29. " (四)	15. " (九)	30. " (五)
1.春秋学概説	16.文公・宣公解説(一)																																		
2.題辞の説明	17. " (二)																																		
3.隱公解説(一)	18. " (三)																																		
4. " (二)	19. " (四)																																		
5. " (三)	20. " (五)																																		
6. " (四)	21.成公・襄公解説(一)																																		
7.桓公・莊公・僖公解説(一)	22. " (二)																																		
8. " (二)	23. " (三)																																		
9. " (三)	24. " (四)																																		
10. " (四)	25. " (五)																																		
11. " (五)	26.昭公解説(一)																																		
12. " (六)	27. " (二)																																		
13. " (七)	28. " (三)																																		
14. " (八)	29. " (四)																																		
15. " (九)	30. " (五)																																		
準備学修 (予習・復習等に必要な時間又はそれに準じる程度の具体的な学修内容)	予習としては、原文テキスト(コピー)を事前に配布するので、受講者はその原文の内容を辞書や参考書を利用して平明な日本語に訳して発表できるように準備する。講義では、発表されたものを訂正し、補正し、さらに参考文献等を紹介し、復習の役に立てるよう図る。																																		
学生に対する評価方法	平常点+レポート(各50%)																																		
テキスト	『春秋筆削大義微言考』(萬木草堂刊本)コピー 『康有為全集』第6巻 中国人民大学出版。 竹内弘行『康有為と近代大同思想の研究』汲古書院。																																		
参考文献																																			

〔博士後期課程〕

科 目 名	日本史研究(I)(文化史研究) 研究指導				
担当教員名	教授 松 蘭 斎	単位数	—	配当学期(日進)	通年
授業科目の概要	研究方法の指導				
到達目標	学会での報告及び研究雑誌等に論文発表				
授業計画	上記のための指導を適宜行う				
準備学修 (予習・復習等に必要な時間又はそれに準じる程度の具体的な学修内容)	なし				
学生に対する評価方法	研究成果				
テキスト	なし				
参考文献					

科目名	日本史研究(Ⅱ)(社会経済史研究) 研究指導				
担当教員名	教授 福島金治	単位数	一	配当学期(日進)	通年
授業科目の概要	(1年)修士論文の内容を精査して論文の達成内容を確認し、新たな研究への取り組みを開始する。 (2年)博士後期課程1年の成果を確認し、論文の質を高め学位論文完成への見通しをつける。 (3年)博士後期課程3年目となり、学位論文完成への章構成を作成し完成への見通しをつける。完成した部分と現状で足りない部分を確認し、さらなる高みをめざす。				
到達目標	(1年) 研究テーマの深化を目的とする。研究報告を行い、内容を討論して問題点を発見し一層の向上をはかる。 1)これまでの自身の研究を整理して発表する。 2)研究史を整理して、問題点と課題を発見する。 3)基本となる論文を輪読して討議する。 4)研究の素材となる史料を蒐集・精査し、これまでの研究と対照する。 5)論文を作成し、研究会等で発表し、自身の立場を確認する。 (2年) 研究テーマの深化を目的に、報告を行い内容について討論して問題点を発見し、研究の一層の発展をはかる。 1)これまでの自身の研究を整理して発表する。 2)研究史を整理して、問題点と課題を発見する。 3)基本となる論文を輪読して討議する。 4)研究の素材となる史料を蒐集・精査し、これまでの研究と対照する。 5)論文を作成し、研究会等で発表し、自身の立場を確認する。 6)学会誌に論文を投稿し、掲載できるようにする。 (3年) 院生の研究テーマの進展と深化を目的に、面接しながら内容を討論し問題点を発見し、研究の一層の発展と向上をはかる。 1)これまでの自身の研究を整理して発表する。 2)研究史を整理して、問題点と課題を発見する。 3)基本となる論文を輪読して討議する。 4)研究の素材となる史料を蒐集・精査し、これまでの研究と対照する。 5)論文を作成し、研究会等で発表し、自身の立場を確認する。 6)学会誌に論文を、複数、投稿して掲載できるようにする。				
授業計画	1 ガイダンス 2 研究発表と質疑 3~8 研究史の基本となる論文を輪読し、課題を発見する。 9~12 基本的史料を輪読し、他の論文とつきあわせ、討議する。 13・14 論文作成のために発表し、問題点を検討する。 15 論文を完成させる。 (注)春・秋学期ともに1サイクルで、くりかえす。				
準備学修 (予習・復習等に必要な時間又はそれに準じる程度の具体的な学修内容)	研究会・学会に参加して見聞を広め、自身の論文の完成をめざす。				
学生に対する評価方法	(1年)論文作成・研究発表で全体を評価する。 (2・3年)(1)論文作成・研究発表で全体を評価する。 (2)学会誌への投稿論文で評価する。				
テキスト	院生の関心に沿って、適宜、配布する。				
参考文献					

科目名	日本史研究(Ⅲ)(政治史研究) 研究指導				
担当教員名	教授 中川すがね	単位数	一	配当学期(日進)	通年
授業科目の概要	院生各自の研究を深めるため、研究発表・論文講読・史料輪読、論文作成の指導を実践的におこなう。				
到達目標	1修士論文等をまとめ、発表する。				
授業計画	1~5 打ち合わせ・研究報告 6~7 論文講読と研究史整理 8~15 史料読解 16~20 打ち合わせ・研究報告 21~22 論文講読と研究史整理 23~30 論文作成指導 上記スケジュールは適宜変更する。				
準備学修 (予習・復習等に必要な時間又はそれに準じる程度の具体的な学修内容)	院生として論文作成のために主体的に取り組むことが必要である。				
学生に対する評価方法	研究報告・講読・輪読により評価する。				
テキスト	授業中に適宜紹介する。				
参考文献					

科 目 名	東洋史研究(Ⅱ)(社会経済史研究) 研究指導				
担当教員名	教授 菊 池 一 隆	単位数	一	配当学期(日進)	通年
授業科目の概要	<p>(1年)将来、修士論文を書くために論述の仕方、論理的展開をするための基礎を築く。特に一級史料を調査、収集する能力と構成力、分析力を強化する。</p> <p>(2年)将来、博士論文を書くための論述の仕方、構成、論理的展開をするための能力を徹底的に強化する。特に分析力と結論を導き出す力を強化する。</p> <p>(3年)学内のみならず、東海地方の各大学の院生との研究交流もおこなわせ、研究会に積極的に出席、報告する機会を与え、実力をアップする。考える力、探究力を養い、院生自らが私の指導を受けながらも、それを乗り越えていく積極性、主体性を發揮させる。このことは、必然的に全国学会でも発表できる力となる。</p>				
到達目標	<p>院生・研究員の研究テーマに即して、継続的に研究成果があげられるように指導する。具体的な目標としては、各自分が主体的に関心のもつ東洋史のテーマを探査し、投稿論文、博士論文の作成にあるが、その過程で、実証力、分析力、まとめあがめの力、探究する力、歴史の本質を考える力を強化していく。他人の発表にも疑問や質問を出し、討論に積極的に参加することが望ましい。各種研究会や学会での発表にも挑ませ、その予備報告の場とする。できれば各自分がもつ潜在力を呼び覚まし、全国歴史学界でも通じる力を持たせたい。</p>				
授業計画	1.導入 2.論文作成のための指導(1) 3.論文作成のための指導(2) 4.論文作成のための指導(3) 5.個別発表と討論(論文構想、及び関連本、論文、史料)(1) 6.個別発表と討論(論文構想、及び関連本、論文、史料)(2) 7.個別発表と討論(論文構想、及び関連本、論文、史料)(3) 8.個別発表と討論(論文構想、及び関連本、論文、史料)(4) 9.中間報告と討論(内容の不十分な部分の発表)(1) 10.中間報告と討論(内容の不十分な部分の発表)(2) 11.中間報告と討論(内容の不十分な部分の発表)(3) 12.中間報告と討論(内容の不十分な部分の発表)(4) 13.個別発表と討論(各自の構想に基づき研究を深化)(1) 14.個別発表と討論(各自の構想に基づき研究を深化)(2) 15.個別発表と討論(各自の構想に基づき研究を深化)(3)	16.個別発表と討論(各自の構想に基づき研究を深化)(4) 17.個別発表と討論(各自の構想に基づき研究を深化)(5) 18.個別発表と討論(各自の構想に基づき研究を深化)(6) 19.個別発表と討論(各自の構想に基づき研究を深化)(7) 20.個別発表と討論(各自の構想に基づき研究を深化)(8) 21.個別発表と討論(各自の構想に基づき研究を深化)(9) 22.これまでの個別発表をまとめ、報告(1) 23.これまでの個別発表をまとめ、報告(2) 24.これまでの個別発表をまとめ、報告(3) 25.これまでの個別発表をまとめ、報告(4) 26.未完成部分、不十分な部分の補強(1) 27.未完成部分、不十分な部分の補強(2) 28.未完成部分、不十分な部分の補強(3) 29.最終報告 30.総括			
準備学修 (予習・復習等に必要な時間又はそれに準じる程度の具体的な学修内容)	<p>(1年)院生は自覚していると考えるが、当然のことながら自らの報告の予習、復習は不可欠である。また、実力アップのためには他の院生の報告に対する予習、復習をするよう指導している。最低、歴史学科の共同研究室(3号館4F)を利用して、予習・復習の習慣を身につけてもらいたい。</p> <p>(2年)予習、復習は不可欠であることは、院生諸氏が理解しているとおりであり、報告準備、報告後の反省と課題を導き出す力を養って、実力アップできるよう指導する。</p> <p>(3年)予習・報告準備、復習・報告後の未熟な点の補正・発展は不可欠である。院生は当然、そのことを自覚しているはずであるが、私も指導する。</p>				
学生に対する評価方法	各自の研究報告の内容、構想力、史料の使い方、探究度、分析力、及び努力、論文の質量、質疑応答の内容などを総合的に判断して評価する。				
テキスト					
参考文献	各自の研究、報告に対して適時指導する。				

科 目 名	西洋史研究(Ⅱ)(政治経済史研究) 研究指導					
担当教員名	教授 小林 隆夫	単位数	一	配当学期(日進)	通年	
授業科目の概要	博士後期課程の大学院生が専攻するテーマに関する先行研究や史料等の読解・解釈の指導を通して、学会発表や研究論文の作成ができるように指導する。					
到達目標	<p>(1・3年)博士後期課程の大学院生が、自らの研究テーマや関連研究を深化させ、学会での研究報告や学術論文の作成ができるようになる。また、それらの積み重ねを通して学位論文を作成していく力を身につける。</p> <p>(2年)博士後期課程の大学院生が、自らの研究テーマや関連研究を深化させ、学会での研究報告や学術論文の作成ができるようになる。また、それらの積み重ねを通して学位論文を作成していく力を身につける。</p>					
授業計画	(1年) 1. 春学期ガイダンス 2. 研究テーマおよび研究動向に関する話し合い 3. 研究文献と史料収集についての確認 4. 主要研究文献・史料の読解および討論① 5. 主要研究文献・史料の読解および解説② 6. 主要研究文献・史料の読解および解説③ 7. 主要研究文献・史料の読解および解説④ 8. 主要研究文献・史料の読解および解説⑤ 9. 主要研究文献・史料の読解および解説⑥ 10. 主要研究文献・史料の読解および解説⑦ 11. 主要研究文献・史料の読解および解説⑧ 12. 主要研究文献・史料の読解および解説⑨ 13. 主要研究文献・史料の読解および解説⑩ 14. 研究の整理と発表 15. まとめ 16. 秋学期ガイダンス 17. 研究テーマの確認と再検討 18. 主要研究文献・史料の読解および討論① 19. 主要研究文献・史料の読解および解説② 20. 主要研究文献・史料の読解および解説③ 21. 主要研究文献・史料の読解および解説④ 22. 主要研究文献・史料の読解および解説⑤ 23. 主要研究文献・史料の読解および解説⑥ 24. 主要研究文献・史料の読解および解説⑦ 25. 主要研究文献・史料の読解および解説⑧ 26. 主要研究文献・史料の読解および解説⑨ 27. 研究動向に関する検討① 28. 研究動向に関する検討② 29. 論文執筆指導 30. まとめ	(2年) 1. 春学期ガイダンス 2. 研究テーマおよび研究動向に関する話し合い 3. 研究文献と史料収集についての確認 4. 主要研究文献・史料の読解と解説① 5. 主要研究文献・史料の読解と解説② 6. 主要研究文献・史料の読解と解説③ 7. 主要研究文献・史料の読解と解説④ 8. 主要研究文献・史料の読解と解説⑤ 9. 主要研究文献・史料の読解と解説⑥ 10. 主要研究文献・史料の読解と解説⑦ 11. 主要研究文献・史料の読解と解説⑧ 12. 主要研究文献・史料の読解と解説⑨ 13. 主要研究文献・史料の読解と解説⑩ 14. 研究の整理と発表 15. まとめ 16. 秋学期ガイダンス 17. 研究テーマの確認と再検討 18. 主要研究文献・史料の読解と解説① 19. 主要研究文献・史料の読解と解説② 20. 主要研究文献・史料の読解と解説③ 21. 主要研究文献・史料の読解と解説④ 22. 主要研究文献・史料の読解と解説⑤ 23. 主要研究文献・史料の読解と解説⑥ 24. 主要研究文献・史料の読解と解説⑦ 25. 主要研究文献・史料の読解と解説⑧ 26. 主要研究文献・史料の読解と解説⑨ 27. 研究動向に関する報告と検討① 28. 研究動向に関する報告と検討② 29. 論文執筆指導 30. 総括	(3年) 1. 春学期ガイダンス 2. 過去2年間にわたり蓄積した研究動向の確認 3. 最新の研究文献と史料収集についての確認 4. 主要研究文献・史料の読解と解説① 5. 主要研究文献・史料の読解と解説② 6. 主要研究文献・史料の読解と解説③ 7. 主要研究文献・史料の読解と解説④ 8. 主要研究文献・史料の読解と解説⑤ 9. 主要研究文献・史料の読解と解説⑥ 10. 主要研究文献・史料の読解と解説⑦ 11. 主要研究文献・史料の読解と解説⑧ 12. 主要研究文献・史料の読解と解説⑨ 13. 主要研究文献・史料の読解と解説⑩ 14. 研究の整理と発表 15. 小括 16. 秋学期ガイダンス 17. 研究テーマの確認と再検討 18. 主要研究文献・史料の読解および討論① 19. 主要研究文献・史料の読解と解説② 20. 主要研究文献・史料の読解と解説③ 21. 主要研究文献・史料の読解と解説④ 22. 主要研究文献・史料の読解と解説⑤ 23. 主要研究文献・史料の読解と解説⑥ 24. 主要研究文献・史料の読解と解説⑦ 25. 研究動向に関するレポートの作成についての指導① 26. 研究動向に関するレポートの作成についての指導② 27. 研究動向に関するレポートの作成についての指導③ 28. 研究動向に関するレポートの作成についての指導④ 29. 研究動向の整理についての研究ノート・論文執筆指導 30. 同上②			
準備学修 (予習・復習等に必要な時間又はそれに準じる程度の具体的な学修内容)	<p>(1・3年)予習 毎回の指導に備えて、研究書・資料を読解し、その内容を確認しておく。</p> <p>(2年)予習 每回の指導に備えて、研究書・資料を読解し、その内容を確認しておく。</p> <p>復習 指導で理解した研究上の要点を整理して、研究史の流れを確認しておく。</p>					
学生に対する評価方法	課題に対しての取り組み・報告50%、研究報告レポート50%で評価する。					
テキスト						
参考文献	受講生の研究テーマに即した文献・資料を選択して適宜使用していく。					

科 目 名	考古学研究(I)(先史考古学研究) 研究指導								
担当教員名	教授 白石浩之	単位数	一	配当学期(日進)	通年				
授業科目の概要	(1年)論文の視点や方法について具体的に執筆できるように指導する。 とりわけ考古学は遺物を多く分析することが要される。その上に立って研究の視点が組み立てられよう指導する。 (2年)論文の視点や方法に基づいて具体的に論文が執筆できるようにする。 とりわけ考古学は遺物を多く分析することが要される。その上に立って研究の視点が組み立てられよう指導する。 (3年)論文の視点や方法に基づいて具体的に論文が執筆できるようにする。 とりわけ考古学は遺物を多く分析することが要される。その上に立って研究の視点が組み立てられよう指導する。								
到達目標	(1・3年)課題にもとづいた研究の深化を促進させるために、研究の方法論、独創性を引き出すことを中心に指導していく。他方机上の空論に陥りやすいので、実資料にもとづいた着実なモノの見方、考え方を育てていきたい。 こうした実践方法をとおして論文として深化させるようにしたい。 (2年)課題にもとづいた研究の深化を促進させるために、研究の方法論、独創性を引き出すことを中心に指導していく。他方机上の空論に陥りやすいので、実資料にもとづいた着実なモノの見方、考え方を育成する。 こうした実践方法をとおして論文として深化させるようにしたい。								
授業計画	1 はじめ 2 課題への構想 3 課題への目次 4 課題への要旨 5 " 6 " 7 " 8 課題への問題点とその方法 9 " 10 " 11 課題への文献 12 課題への研究視点の展望 13 " 14 " 15 "	16 課題への文章組み立て 17 " 18 " 19 " 20 " 21 " 22 " 23 " 24 " 25 課題への図・表 26 課題への註・参考資料 27 課題への検索項目 28 課題への要旨 29 課題への全体構成 30 "							
準備学修 (予習・復習等に必要な時間又はそれに準じる程度の具体的な学修内容)	毎週土曜日を中心として出土品整理を考古学整理室で実施しています。積極的に参加し、出土品の分析や報告書作成にかかるノウハウを体得することが重要です。								
学生に対する評価方法	(1・2年)研究意欲・発言内容、試験により総合的に評価する。 (3年)課題に対しての取り組み方、まとめ方、発表等を総合的に判断して評価する。								
テキスト	(1・2年)その都度プリントを印刷してテキストとする。								
参考文献	(1・2年)白石浩之2008『旧石器時代の社会と文化』日本史リブレット1 山川出版社、今村啓爾2008『縄文の豊かさと限界』日本史リブレット2 山川出版 (3年)井尻正二 1976『独創の方法』玉川大学出版部								

科 目 名	考古学研究(II)(歴史考古学研究) 研究指導				
担当教員名	教授 藤澤良祐	単位数	一	配当学期(日進)	通年
授業科目の概要	本研究指導では、博士課程後期の学生が、歴史考古学における各自の研究の深化を図るとともに、学会での研究発表や学術論文の作成を通して、研究者として自立できるよう指導したい。最終的には学位請求論文の執筆に結実できるよう指導していきたい。				
到達目標	各自の学位請求論文のテーマに即した学術論文を、少なくとも1年間に1本は執筆することによって、学位請求論文の作成に結実させることを目標とする。				
授業計画	1. ガイダンス(1回) 2. 研究現状の発表と問題点の抽出(2回) 3. 研究テーマの検討と研究計画の策定(3回) 4. 研究史の整理と問題点の抽出(4~8回) 5. 研究テーマと内容構成の決定(9回) 6. 考古資料の収集と分類(10~15回) 7. 文献資料の収集と選択(16・17回) 8. 論文要旨の発表と検討(18・19回) 9. 図表の作成指導(20~22回) 10. 論文の執筆指導(23~28回) 11. 最終報告と課題(29回) 12. 総括(30回)				
準備学修 (予習・復習等に必要な時間又はそれに準じる程度の具体的な学修内容)	各自の研究内容と研究の進捗に応じて適宜指示する。				
学生に対する評価方法	研究発表の内容、論文の構成、考古資料の扱い方、研究態度等を加味して総合的に評価する。				
テキスト					
参考文献	各自の研究内容と研究の進捗に応じて適宜紹介する。				